愛の妙薬

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
愛の妙薬

【Ｎコード】
Ｎ３４１１Ｆ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
スペインバスクのある村。あまり頭はよくないが純朴な青年ネモリーノは利発な娘アディーナに恋焦がれている。ところがここに胡散臭い山師とひょうきんな軍隊がやって来て。ドニゼッティのオペラを小説にしたドタバタ恋愛コメディーです。
こちらにも掲載してもらっています。
ｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｐａｉｎｗｅｓｔ．ｎｅｔ／

第一幕その一

愛の妙薬

第一幕　山師来たる

かなり昔の話である。スペインのとある片田舎での話だ。
素朴な時代であった。人々は少ししたことで笑い、泣き、楽しみ、そして悲しんだ。そうした古い時代の純朴な人々の話である。
小さな村である。これといって変わったところのないごくありふれた村であった。見れば何やら騒ぎ声が聞こえてくる。
「洗濯物はここでいい？」
小川のほとりで女達が山の様な洗濯物を籠に入れて話をしている。女達の他にも男達もいる。どうやら畑仕事も一段落して休んでいるようだ。
「酒は何処だ」
「チーズは？」
彼等は休息を楽しんでいた。そして乾いた喉を酒で潤そうとしていた。
「こっちよ」
「どうぞ召し上がれ」
女達が彼等に杯を差し出す。男達はそれを受け取るとすぐに飲み干した。
「美味い」
彼等はにんまりと笑ってそう言った。
「やっぱり一仕事終えた後の一杯は最高だな」
「そうだな。この為に生きているようなものだからな」
彼等は口々にそう言う。そして小川のせせらぎや優しい風に身体を委ね心地良く酒とチーズを楽しむのであった。
そんな中一人の若者が出て来た。見れば顔中髭だらけで血色のよい顔をしている。髭だらけだが決して悪い顔ではない。愛敬のある

顔立ちであった。
　太った身体を青いシャツと茶色のチョッキ、そしてチョッキと同じ色のズボンで包んでいる。靴は長靴でありそれが如何にも農業に携わっている者であるという感じを醸し出していた。見れば所々土で汚れている。靴には泥がついている。
「アディーナは何処かな」
　彼は何かを探していた。そして辺りをキョロキョロと見回っていた。
「ネモリーノ、どうしたの？」
　ここで一人の小柄な少女が話し掛けてきた。青い服に身体を包んでいる。金髪でおさげにした青い目の少女だ。顔にソバカスのある可愛らしい少女だ。
「ジャンネッタ」
　ネモリーノと呼ばれたその青年は少女に顔を向けた。
「またアディーナを探してるの？貴方も懲りないわね」
　悪戯っぽく笑いながらそう言う。
「いいじゃないか、君には関係ないだろう」
　ネモリーノはその言葉にムッとして言った。如何にも癪に触ったようである。
「いい加減諦めなさいよ、あの人は貴方には合わないわ」
「そうしてわかるんだよ」
　ネモリーノは彼女の言葉にさらに不機嫌になった。声にそれを露骨に表している。
「だってあの人は何かと目立つじゃない。それにひきかえ貴方は」
「野暮ったいって言うんだよ」
「ええ」
「いいじゃないか、僕が別に野暮ったくて」
「まあ外見はいいわ。それは服ですぐに変わるし。けどね」
「けど・・・・・・何だい！？」
「やっぱり貴方とアディーナは合わないと思うわ。あの人気が強い

し」
「だから好きなんだよ」
ネモリーノはそれに対して言った。
「僕は彼女のそういうしっかりしたところが好きなんだ。そして可愛いし頭もいいし本も読むことができる。本当に素晴らしいと思わないかい？」
「まあね」
ジャンネッタもそれには同意した。
「彼女と一緒になれたらなあ。他には何も要らないよ」
ネモリーノはうっとりとした顔で言った。目元は緩み口には笑みが零れている。
「本当に好きなのね」
「だから前からそう言ってるじゃないか」
ネモリーノは口を尖らせた。
「僕は彼女しか目に入らない。他には何も要らないんだよ」
「お金も？」
「それが何になるというんだ」
彼はあまり裕福ではない。隣の村に金持ちの叔父がいる。だが彼はそれをあまり意識してはいなかった。
「お金は必要なだけあればいいんだ。僕はそんなものはどうだっていいんだ」
「そうなの」
「お金があってもアディーナがいなければ何にもならないから」
そしてまた言った。
「そんなもの欲しくとも何ともないんだ、僕にとっては」
「あら、無欲なのね」
ジャンネッタはまたからかうようにして言った。
「けれどそれじゃあ駄目よ」
「何故だい？」
「女っていうのはね、お金も見るのよ。、ましてや貴方ときたら」

「僕ときたら！？」
ネモリーノは彼女の言葉に怪訝そうな顔をした。
「文字は読めないのはいいけれど外見も野暮ったいし頼りないし。お金がなかったらとても女の子にはもてないわよ」
「だから他の子にもてても嬉しくないんだ。アディーナにもてないと」
「あらあら、本当に重症ね」
彼女はそれを聞いてもうお手上げという仕草をしてみせた。
「けれど諦めた方がいいと思うのは本当よ。貴方ではとても彼女の心を射止めることはできないわ」
「そんなことわかるわけがないじゃないか」
「あらあら」
そう処置なしと言いたげであった。
「けれどそのうちわかるわ。まあその時になって落ち込まないようにね」
そう言うと彼女は皆のいるところへ軽い足取りで向かった。あとにはネモリーノだけが残った。
「何だい、いつも僕をからかって」
彼は渋い顔をしてそう言った。
「僕の気持ちを知っているのなら黙っていてくれよ。もしこれがアディーナの耳にでも入ったら」
そこでそのアディーナの顔を思い出した。
「彼女が僕の恋人だったらなあ。本当にどれだけいいか」
彼は溜息をつきながらそう呟いた。
「恋人だったらなあ。彼女が僕を愛してくれさえいてくれたら」
半ば恍惚とした顔になった。
「他には何もいらないのに」
そして皆のいるところに向かった。見れば皆輪になって誰かの話を聞いている。
「彼女だ」

ネモリーノはその輪の中心にいる小柄で赤い服の女を見て言った。

黒いおさげの髪に瞳をした女であった。小柄だが胸も大きく容姿はいい。白い顔に紅い唇が映えその黒い瞳は大きく丸い。美人というよりは可愛らしい外見である。大柄で太めのネモリーノとは正反対の姿であった。

「アディーナ、今日は何の話をしてくれるんだい？」

皆は彼女に尋ねていた。ネモリーノはこっそりとその輪の中に入った。

第一幕その二

「今日はね」
彼女は手にした本を広げながら言った。
「トリスタンとイゾルデのお話よ」
「トリスタンとイゾルデ！？」
「一体どんな話なの！？」
皆はそれを聞いただけで目を輝かせていた。
「聞きたい？」
アディーナはそんな皆に対して尋ねた。
「勿論」
皆はそれに対して当然といったふうに答えた。これで決まった。
「それじゃあ」
彼女は本を顔の前に持って来た。そして読みはじめた。
「コーンウォールにいたトリスタンという騎士はアイルランドの美しいお姫様イゾルデに恋をしました。けれど冷たい彼女は一向に振り向いてくれません」
「僕と同じだなあ」
ネモリーノはそれを聞いて呟いた。
「本当にどうにかならないかなあ」
「それでそのトリスタンという騎士はどうしたの？」
皆はアディーナに続きを尋ねた。やはり彼等の殆ども字が読めないのだ。
「それで彼は知り合いの魔法使いに尋ねました。どうしたら姫に愛されるようになるか」
「僕も愛されたい」
ネモリーノはそこでまた呟いた。
「その魔法使いは彼にあるものを手渡しました。それはどんな人でも振り向かせることのできる愛の妙薬でした。トリスタンはそれを

貰うとすぐに飲みました」
「愛の妙薬」
ネモリーノはそれを聞いてハッとした。
「それがあれば僕も」
だが誰も彼のそんな様子には気付かない。ただアディーナの話の続きを待っている。
「飲んでどうなったの！？」
「あとはもうおわかりの通り」
彼女は悪戯っぽく笑って言った。
「氷の様なお姫様も彼に夢中になってしまいました。こうしてトリスタンは想いの人を手に入れることができたのです」
「いい話だなあ」
皆それを聞いて頷きながら言った。
「そんな薬があれば」
「本当だよ」
ネモリーノはそれを聞いて言った。
「僕にその薬があれば」
そこでアディーナを見た。
「彼女だって僕を振り向いてくれるのに」
それを思うだけでたまらなかった。彼はその話を聞いて増々アディーナを欲しいと思った。
「欲しいなあ、そんな薬」
村人達は話を聞き終えるとうっとりとして言った。
「そうしたら恋が実るのに」
「格好いい彼氏が手に入るのに」
それぞれ思うところは少し違うがおおむね同じであった。誰もが恋を思ってその薬のことを欲しいと思った。
皆口々に話をした。その薬について。ここで太鼓を叩く音が聞こえてきた。
「あら」

娘達が太鼓の音がした方に顔を向けた。
「軍の行進の太鼓の音だな」
年老いた男が言った。
「ああ、そういえば今日辺りここに軍が来るんだったな。宿営に」
「宿屋が準備をしていたぞ、大喜びで」
「何、それを早く言え」
「酒屋の旦那、あんたはいつものんびりし過ぎるんだよ、それ位前もって聞いておけよ」
村人達はそう言いながら道を開ける。するとそこに軍の一団がやって来た。
見れば四十人程である。おそらくこの村の宿営のためだけの部隊らしい。おそらく訓練か何かで立ち寄ったと思われる。殺伐としたところはなく穏やかな様子であった。軍服も綺麗で銃もよく手入れされていた。
「やあやあ皆さん」
その中の一人が村人達の前に出て来た。
「お騒がせして申し訳ない。私はこの隊の軍曹でベルコーレという者ですが」
見れば立派な口髭を生やした偉丈夫である。肩の階級章が兵士達のそれよりも立派であった。手には小さな花束がある。
「皆さんに一時の休息の場を頂きたい。よろしいでしょうか」
「喜んで」
「一緒に楽しくやりましょう、束の間の休息を」
村人達は快くそれを認めた。
兵士達は村人達の間に入る。そして共に酒と食べ物、そして談笑を楽しみはじめた。
「何か面白い人ね」
アディーナはベルコーレを横目に見てジャンネッタに囁いた。
「そうね。わりかし格好いいし」
「キザっぽいところもあるけれどね」

見れば軍服の胸のポケットに花なぞを入れている。髭もよく切り揃えてあり髪にも油を塗っている。かなりの伊達男であることはすぐにわかった。
「おや」
ここでベルコーレもアディーナ達に気付いた。
「これはこれは」
そして二人に近付いて行った。
「一体何をする気だ！？」
ネモリーノはそれを見て顔を顰めさせた。
「僕のアディーナに言い寄ったら只じゃおかないぞ」
そう言いながら如何にも不安そうな様子で成り行きを見守った。
ベルコーレはそれに気付くことなく手に持っている小さな花束をアディーナに差し出した。
「可愛らしいお嬢様だ」
そしてその花束をアディーナに差し出した。
「これはささやかな貢ぎ物です」
だがアディーナはそれは手にとらない。じっとベルコーレを見ている。
「どういうつもりだ！？」
ネモリーノは身を乗り出してそれを注視した。
「まさかあいつ」
もう気が気でなかった。ふとアディーナの視界の端に入ったように見えた。だが彼女はそれがわかっているかどうか。顔には全く出さない。ただベルコーレを見据えている。

第一幕その三

「何の御用でしょうか」
そしてしれっとした態度で逆に彼に対して尋ね返した。
「おや、これは手厳しい」
ベルコーレはそれに対しておどけてかわした。
「では正攻法で行きましょう」
「正攻法」
「左様。美女を陥落させるのには古来から多くの方法があります」
ベルコーレは気取った物腰で言った。
「何をする気だ、嫌味ったらしい奴め」
ネモリーノは二人のすぐ側に来た。そしてベルコーレをジロリ、と睨んだ。
「ん！？」
ベルコーレも彼に気付いた。だが意に介さない。アディーナに専念することにした。
「戦場においてあれこれと考えていると命が幾つあっても足りません。すぐに動かないと死んでしまいますから」
「ここは戦場ではないわよ」
アディーナは切り返した。
「いえ、私は今戦っています」
「誰と？」
「目の前の可愛い娘さんとね」
そう言ってにやりと笑った。
「何」
ネモリーノはさらにその視線を険しくさせた。
「軍人は思ったらすぐに動くもの、突撃に躊躇してはなりません」
「私は要塞じゃないわよ」
「美女は要塞と同じ、攻略しなければなりませんから」

「攻略だと！？」
ネモリーノはまた言った。
「何か変なのがいるな」
ベルコーレは彼を横目で見て呟いた。
（見たところあまり賢そうな奴ではないな。この村の農民か。それにしても間の抜けた顔をしている）
横目でネモリーノを見ながらそう思った。
（まあ無視していていいな。それよりも今は）
そしてアディーナに視線を戻した。
（目の前の要塞を攻略しなくちゃならんからな）
結論を下すとまた攻撃を開始した。
「では白旗は揚げられないのですな」
「だって要塞なんかじゃありませんから」
アディーナはまたあっさりとかわした。
「白旗なんて持っていないわよ。本なら持っているけれど」
そう言って手に持っている本を見せた。
「要塞にはこんな本はないわよね」
「確かに」
ベルコーレは半歩退いた。だが撤退はまだだ。
「軍曹さん、貴方は少しせっかちね。私はまだはいともいいえとも言ってはいないわよ」
「ではお答えはまだですかな」
「どうでしょうね」
アディーナははぐらかした。
「時間はあるのでしょう」
「まあ数日程ですが」
「その間よくお考え遊ばせ。私が攻略するに値する要塞かどうか。格好のいい人は移り気ですから」
「おっと、これは手厳しい」
ベルコーレは彼女の反撃に口を尖らせて渋い顔をしてみせた。

「ではここは一時休戦といこう。兵士達は宿に向かってよろしいですかな」
「ええ」
村人達がそれに頷いた。
「どうぞ。既に話は済んでいるのでしょう？」
「はい」
ベルコーレは答えた。
「ではお言葉に甘えて。おい」
そして周りで休息をとっている兵士達に声をかけた。
「一旦宿に向かうぞ。そしてそこで荷物や銃を置いた後当直の者以外は皆自由行動だ」
「はっ」
彼等は一斉に立ち上がり敬礼をして応えた。こういった動作はやはり軍人ならではであった。
「さて」
彼は命令を終えるとアディーナに顔を向けた。
「お嬢さん、また後で」
にいっ、と笑みを浮かべて言った。そして兵士達を引き連れて宿に向かった。
「さあ皆さん」
それを見届けたアディーナは彼等に語りかけた。
「今のうちに今日の仕事の分を終わらせましょう。今日は兵隊さん達のお相手もしなくちゃいけませんし」
「宴だな」
彼等は楽しそうに言った。
「ええ。けれどそれは仕事が終わってから。早く終わればその分だけ楽しめますよ」
「よし」
アディーナの言葉に乗ることにした。
「じゃあ今から頑張ってすぐに終わらせるか。そしてその後は」

「美味い酒に食い物がわし等を待ってるぞ」
彼等は口々に言った。
「では行くとしよう、仕事を終わらせに」
「おう、そして酒を浴びる程飲もうぜ」
「おっさん、あんたはいつも飲んでるだろうが」
「おっと、そうだったかな、ははは」
そしてそれぞれの仕事場に向かった。後には二人だけが残った。
ネモリーノとアディーナである。
「アディーナ」
ネモリーノは早速彼女に声をかけた。
「何、またいつもの？」
対する彼女は余裕をもって彼を見ていた。
「いつものじゃないよ」
それに対するネモリーノの顔は必死そのものである。
「アディーナ、僕の気持ちはわかっているだろう」
「毎日聞いているからね」
「じゃあわかってくれよ、君が好きなんだ」
「だからそれも毎日言っているでしょう？」
アディーナはすげない態度で返した。
「私は貴方には合わない、って。だから他をあたりなさい」
「それができないのはわかっているだろう」
「あら、どうかしら」
だが彼女は相変わらずすげない。
「人の気持ちなんてころころ変わるものよ。貴方も私も」
「僕の気持ちは変わらないよ、ずっと。君だけだ」
彼はあくまでアディーナにすがる。
「君以外もう誰も目に入らないんだ」
「そんなの一時の気の迷いよ」
「違う」
ネモリーノは首を横に振った。

第一幕その四

「僕の気持ちはそんなものじゃないんだ、わかってくれよ」
「ええ、わからないわ」
冷たくあしらった。
「貴方には私みたいな移り気な女は合わないし私も貴方は好みじゃないの。これも毎日言ってるわね」
「それでも僕は君だけなんだ。これも毎日言ってるのに」
「そうやって毎日私に言い寄ってくるけれど」
アディーナはネモリーノをかわしながら反撃に出た。
「そんなことしていていいの？隣の村の叔父さんは大丈夫なの？」
「・・・・・叔父さんと僕が何の関係があるんだよ」
ネモリーノは憮然とした顔で答えた。
「あるわ、確か危篤なのでしょう？言ってあげなくていいの？」
「叔父さんも気懸りだけれど僕にはアディーナ」
そしてまた彼女を見詰めた。
「僕はもう君しか見えないんだ。君のこと以外に考えられないんだ」
「あら、だったら叔父さんの遺産が他の人に渡ってもいいのね。そうしたら貴方は誰も頼る人も財産もなくて飢え死にするかも知れないわよ」
「いいさ」
ネモリーノは少し俯いて言った。
「僕にとっては同じことさ」
言葉を続ける。
「飢え死にするのも恋で死ぬのも僕には同じことさ。どちらにしろ死ぬんだから」
「またそんな深刻ぶって。明るく考えたら？」
「どうやったら明るく考えられるんだよ、君が振り向いてくれないのに」

ネモリーノは問うた。
「一体どうやったら振り向いてくれるんだい？」
「そよ風に聞いて御覧なさい」
アディーナはやはりすげなく言った。
「それでも私の移り気は治らないでしょうけれどね」
「そんな・・・・・・」
ネモリーノはそれを聞いて絶望しきった顔になった。
「何度も言っているだろう、僕には君しかないんだって。どうして振り向いてくれないんだ」
「気が向かないからよ」
「じゃあどうしたらその気が僕に向いてくれるんだ！？僕はその為だったら何でもするよ、君のためだから」
アディーナはそれを聞いて目の表情を一瞬だけ変えた。だがそれをすぐに消した。
「他の人を探しなさい。貴方を受け入れてくれる人をね」
「他の誰に愛されても意味はないさ」
ネモリーノは首を横に振った。
「君じゃないんだから。君しかいないんだから」
「ずっとその気持ちは変わらないってそこで言うわね、いつも」
「当然さ、本当なんだから」
ネモリーノは強い声で言った。
「僕はこれだけは神様に誓って言えるよ。アディーナ、僕の君への気持ちは永遠に変わらないって」
「それが嘘なのよ」
アディーナはしれっとして言い返した。
「人の心なんてお天気そのものよ。いつも変わるもの。ネモリーノ貴方も私よりも毎日違う女の子に恋したら？そうしたら気が楽になるわよ」
「どうしてだい！？」
ネモリーノは死にそうな顔で問うた。

「恋が恋を打ち消すのよ。毒が毒を打ち消すようにね。少なくとも私はそう考えてるわ」
「それは嘘だ」
ネモリーノはその言葉に首を横に振った。
「僕は昼も夜も、寝ても覚めても君のことだけを考えているんだから。この気持ちは真実なんだ」
「それも一瞬のこと、明日起きてみたら私への想いも変わっているかも知れないわ」
「そんなことはないよ」
「言いきれるの？」
「勿論さ」
彼は言った。
「死ぬまで、そして死んでからも君を愛する。それを何時でも何処でも誓うことができるよ。それでも駄目なのかい！？」
「他の人を愛しなさい」
「できるものか、そんなこと」
ネモリーノはあくまで引き下がらない。
「君をお僕のものにするまでは」
「他の人を愛しなさい」
アディーナはそんな彼に対してまた言った。
「できるものか」
ネモリーノも言った。
「じゃあ諦めなさい、じゃあ仕事があるからこれでね」
業を煮やしたアディーナはその場を軽やかに立ち去った。ネモリーノはそんな彼女を追おうとするが脚が遅くて追いつかない。結局逃げられてしまった。
「ああ」
ネモリーノは見えなくなっていく彼女の後ろ姿を見て溜息をついた。
「いつもこうだ」

その目には涙すら浮かんでいた。
「どうして僕を受け入れてくれないんだ、確かに僕は頭も悪いし見てくれもよくない。けれど」
顔をあげた。そしてアディーナが消えた方を見る。
「君を想う気持ちは誰にも負けないのに」
彼はとぼとぼとその場を後にした。そして自分の畑に戻るべく広場を通りがかった。彼にも畑があるのだ。
広場に着くと何やら人が集まっている。ネモリーノはそれを見てまず思ったことは兵隊達が遊んでいるのかな、ということであった。
「何だろう」
見れば違うようだ。人だかりの真ん中で誰かが話しをしている。
「さあさあ皆様」
立派な身なりの男が村人達を相手に話をしている。老人で品のよさそうな顔立ちに洒落た口髭を生やしている。一目で何やらあやしそうな雰囲気も出しているがネモリーノはそうは思わなかった。
「お医者さんかな」
何故かふとそう思った。
「いや、違うかな」
考えが変わった。
「何なんだろう、変わった人だなあ」
世間知らずな彼ではわかる筈もなかった。少し世の中を知っている者ならば彼が胡散臭げな人間だとすぐに見破ったであろう。それ程あやしい外見に物腰の男であった。

第一幕その五

「実は私はこの度皆さんに素晴らしい贈り物を届けにここへやって来たのです」
「贈り物！？」
村人達がそれに尋ねた。
「はい、こちらの馬車に入っているものですが」
そう言いながら隣にある金色の馬車に手を入れた。一目で妙な馬車だとわかる。だがやはりネモリーノはそうは見ない。
「随分立派な馬車だなあ。何か凄い人みたいだ」
「さてこの取り出したるこの薬ですが」
「薬！？」
「左様、この偉大な天才医師、天下に知られた博物学者ドゥルカマーラが発明した素晴らしい数々の妙薬のほんの一つに過ぎません」
「どんな薬ですか！？」
「はい、これは歯磨きです。これで磨けば虫歯もたちどころに治ります」
「それは凄い！」
だが村人達は何処か割り切っている。こうした口八丁手八丁のいささかいかがわしい者は度々村にやって来ているからだ。とどのつまりドゥルカマーラと名乗るこの男もそうした山師なのであろう。
しかし村人達はそれを心の何処かで承知しているから笑いながら見ている。彼等も楽しんでいるのだ。そして安ければ、話が面白ければ買うつもりだ。
ドゥルカマーラもそれは承知である。だから話を身振り手振りを交えて大袈裟に、面白おかしく続ける。
「さてさて今度は」
そして新たな薬を取り出してきた。
「水虫の薬、そして元気になる薬。そこのご老人も如何ですかな」

「いや、わしは」
話しかけられた老人は照れ臭そうにそれを断る。
「おやおや、ではまた気が向かれた時に。さてさて今度は」
そしてまた新たな薬を取り出した。
「これ若返りの薬、これは如何ですかな？」
「ううむ」
村人達はあえて考える顔をしてみせた。そして彼に問うた。
「お幾らですか？」
「値段ですか」
やはり本当は商売人なのであろう。ドゥルカマーラはその言葉にすぐに反応した。
「何しろこれはいずれも大層効果のあるものばかりでして。かなり値が張りますぞ」
「ええ！？」
村人達はそれに対して抗議の声をあげた。
「それなら止めておこうかな」
「ああ、お金もないしな」
「あいや、待たれよ」
ここで彼はそれを待っていたかのように皆を引き留めた。
「皆様のお気持ち、よくわかりました。それでは勉強して１００スクードでどうですかな」
「高いなあ」
「それだととても買えないよ」
彼等はまた抗議の言葉を出した。
「左様ですか。では３０でどうですかな」
「まだ」
「よし、では２０、いやそれでは皆様の御厚意に答えられそうもありません。それでは」
彼はここでにい、と笑った。
「１スクードでどうでしょうか。流石にこれでは文句がありますま

い」
「勿論！」
「流石太っ腹！」
結局その程度の効用しかないのであろうが話が面白いこともあり皆乗った。それぞれポケットや懐からコインを取り出す。
「俺は歯磨きを！」
「私は若返りの薬！」
「わしは元気の出る薬じゃ！」
「まあまあ皆さん落ち着いて」
ドゥルカマーラはそんな彼等を制して言った。
「薬はどれもたっぷりとありますから。幾らでもお好きなだけ手に入りますから慌てないで。ほら」
そう言って馬車から山の様な薬を出してきた。
「さあさあ順番に。御希望の薬とお金をどうぞ」
こうしたことは手馴れたものであった。こうして彼は村人達に薬を売っていった。
「凄い人だ」
皆大体わかっていたがネモリーノは違っていた。ドゥルカマーラを偉大な医者だと完全に思い込んでいた。
「あの人ならもしかして」
ここで彼はアディーナの顔を脳裏に思い浮かべた。
「僕を救ってくれるかも」
そして彼は皆が立ち去るのを待った。
皆薬を買ってその場を後にした。ドゥルカマーラは薬が売れたのでご満悦であった。
「ううむ、今回はかなり売れたのう」
彼は袋に収めたコインの山を見て嬉しそうに言った。
「これは当分遊んで暮らせるかもな」
「どうしようかな」
ネモリーノはここで迷った。

「僕の話を聞いてくれたらいいけれど」
不安に負けそうになった。逃げたくなる程であった。
「えい、勇気を出せ」
だが彼はここで己を奮い立たせた。
「ここでやらなきゃどうするんだ」
そしてドゥルカマーラに話し掛けた。
「あの」
オドオドとした様子であった。
「何ですかな」
彼はネモリーノに顔を向けてきた。
「先生は何でも不思議な薬を一杯持っておられるそうですけれど」
「ええ、その通りですぞ」
ドゥルカマーラは胸を張って答えた。
「何ならお見せしましょうか、私の持っている数々の薬」
そう言って馬車から薬を次々と出してきた。
「どれがいいですかな、水虫を治す薬も元気が出る薬も何でもありますぞ」
よく見れば単にガラスの瓶に水か酒か何かを入れているだけのようである。だがネモリーノはそれには目をくれない。

第一幕その六

「あの」
そして彼に問うた。
「イゾルデ姫の愛の妙薬はありますか？」
「はい！？」
ドゥルカマーラはそれを聞いて一瞬口を大きく開けた。一体何のことかと思った。
「いえ、あの」
ネモリーノはそれを見て言い方を変えた。
「つまりですね、その・・・・・好きな人に惚れられる薬はありますか」
「ああ、そういうことですか」
ドゥルカマーラはそう言われてそうやく納得した。
「それなら山程ありますぞ」
「本当ですか！？」
ネモリーノはそれを聞いて表情を明るくさせた。
「私は正直者で知られておりまして」
見れば如何にも、という感じが身体全体から漂っている。だがそんなことを気にしていては話にもならない。それにネモリーノはそれにすら気付いてはいない。
「そうなのですか、それはよかった」
彼の怪しげな言葉を疑いもなく信じきっていた。
「それでどんな薬なのですか」
「はい、こちらに」
そこで青い陶器の瓶をネモリーノに差し出した。
「これが愛の妙薬です。値段は一ツェッキーノ。ありますかな」
「はい」
運のいいことに丁度持ち合わせがあった。ネモリーノは財布から

それを取り出してドゥルカマーラに差し出した。
「毎度あり」
彼はにこやかにそれを受け取った。
「有り難うございます」
ネモリーノはそれを受け取るとすぐにドゥルカマーラに対して礼を言った。
「何と言っていいやら。これで僕の夢が叶うんです。それを思うと幸福で胸が張り裂けそうです」
「いやいや」
ドゥルカマーラはそれに対して手を振って鷹揚に応えた。
「私は人として当然のことをしたまでですよ」
実はそう言いながら心の中では舌を出していた。
（ううむ、色々と歩き回ってかなり間の抜けたのを見てきたつもりだがここまで凄いのは見たことがないのう。まさかこれ程のがいるとはな、世の中は広いものじゃ）
いささか呆れている程であった。
「さてお若いの」
だがそうした考えは胸の奥に隠してネモリーノに言った。
「よく振ってからお飲みなされよ。そして中の蒸気が逃げないようにそと栓を開けて飲むのじゃ」
「はい」
ネモリーノはその説明を疑うことなく聞いている。
「飲むとすぐに効き目が出て来ますぞ。ただしそれは一日だけですが」
「一日だけですか」
「はい。けれど貴方へのお気持ちは一生続きます」
「一生・・・・・・。それでもう充分です」
ネモリーノはそれに納得して言った。
（逃げるには充分な時間じゃ）
実はドゥルカマーラは本当はこう考えていたがやはり口には出さ

ない。
「味もいいですぞ」
「そんなにですか」
「はい。薬だというのにその味はまるで甘美な葡萄酒の様です」
「何と・・・・・・それは素晴らしい」
（中身は本当は単なる安物の葡萄酒じゃからな。味は嘘は言っておらぬぞ）
やはり心の中では全くべつのことを考えていた。
「細かいところまで有り難うございます、それではこれで」
「うむ・・・・・・おっと」
ドゥルカマーラは一つ言い忘れていたことを思い出した。そしてウキウキとした足取りで立ち去ろうとするネモリーノを慌てて呼び止めた。
「お若いの、お待ちなされ。一つ言い忘れていたことがあった」
「何ですか！？」
ネモリーノはそれを聞いて立ち止まって振り向いた。
「他の者には黙っておりなされよ。もてる男は妬まれますからな」
「はい、わかりました」
（下手をしたら警察に睨まれるからのう。それだけは避けなければ）
やはりかなり胡散臭いことをしている負い目であろう。警察だけは怖かった。
「よろしいな」
そして念を押した。
（どうもこやつは危ない。ここまでの間抜けだとかえって不安になるわい）
心の中で一言呟くとまたネモリーノに顔を向けた。
「では今日一日は女の群れに注意してな。群がる幸福にお気を着けて」
「あの先生」
ネモリーノはその言葉に対して言った。

「僕は女の人にもてたいとは思わないのです」
「おや、では何故その薬を」
「はい、この薬は」
ネモリーノは両手に持つその薬をいとおしそうに見てから言った。
「一人の人の為に飲むんです。僕が想うたった一人の人の為に」
「そうだったのですか（案外いいところがあるのう：）」
彼は心の中で少し感心した。だが騙すのに罪悪感はなかった。
（明日の朝早くドロンじゃからまいいよいか。この間抜けとはそれでお別れじゃ）
「さて、お若いの」
何食わぬ顔でネモリーノに声をかける。
「よろしくやりなされよ、その愛しい人と」
「はい！」
ネモリーノは元気よく答えた。やはり全く疑ってはいなかった。
「ではな。わしは一杯やらせてもらうとしよう」
「では」
「うむ」
そしてドゥルカマーラは近くにある酒場に向かって行った。そしてその中に入った。
ネモリーノは一人になった。早速その栓を開けようとする。
「おっとと」
だがそこでドゥルカマーラに言われたことを思い出した。
「まずはよく振って、と」
彼が言ったようにまず瓶を振った。
「そしてゆっくりと栓を開ける」
その中身が何であるか本当に疑わしいと思っていない。そして一口口をつけた。
「おや」
味わってみて目の色を変えた。
「これは美味い。先生の仰った通りだ」

そしてゴクゴクと飲みだした。
「美味しいなあ。何か飲んでいると気分がよくなってきたよ」
酒であるからそれも当然であった。だが彼はやはりそれには気付かない。
「ううん、何だか身体が熱くなってきた。もう効きはじめているな」
無邪気に薬が効いていると思っている。

第一幕その七

「今アディーナも同じなんだ、そう思うだけで何と幸福なんだろう」
喜びに打ち震えていた。
「食欲も湧いてきた。何か凄い絶好調だ」
側にある店でパンと果物を買った。元々おやつを買うつもりであった。
「ではいただきます」
そしてそのパンと果物を食べはじめた。
「本当にいい気持ちだ。何て幸せなんだろう」
彼は至って上機嫌で食事を採っている。ふとそこに通り掛かる少女がいた。
「一体誰なのかしら。やけに上機嫌だけれど」
それはアディーナであった。
「あらネモリーノじゃない」
彼女はネモリーノを認めて咄嗟に物陰隠れた。様子を見る為だ。
「どうしたのかしら。さっきまであんなに思い詰めて私に言い寄っていたのに」
彼女はそれが不思議でならなかった。物陰から身を乗り出してネモリーノを見ている。
「おや」
それは当のネモリーノにもわかった。
「来たな」
彼はそれを認めてにこやかに笑った。
「今度は笑ったわね。何があったのかしら」
アディーナはその笑顔を見て余計に不思議に思った。
「暫く様子を見た方がいいわね」
「今に見ていろ」
ネモリーノにもその様子はわかっていた。アディーナを横目で見

ながら笑っていた。
「すぐに僕をいとおしく思ってたまらなくなるからな」
薬の効き目を露程も疑ってはいなかった。すぐに効果が出ると信じている。
「おかしくなったのかしら」
アディーナは薬のことなぞ知るよしもない。自然とそういう考えに至った。
「元々頭の回転の鈍い人だったけれど」
しかしネモリーノには真相はわかっていた。わかっていると信じているだけであった。
「もっと飲むか」
そして薬をまた飲んだ。
「これでどうだ」
そしてアディーナをまた横目で見た。
「気付いているわね」
アディーナもネモリーノが自分を横目で見ていることはわかっていた。
「何を考えているのか知らないけれど」
普段は言い寄られて辟易していた。だがいざこうしてあえて無視されると腹立たしさを覚えるものだ。人間の心理とは実に複雑なものである。
「私を無視するなんていい度胸しているじゃない。見ていらっしゃい」
彼女はネモリーノを見据えて言った。
「絶対後悔させてやるわ」
「フン、今に見ていろ」
ネモリーノも似たような考えであった。
「もうすぐ僕をいとおしく思ってたまらなくなるからな。その時にどれだけ後悔しても知らないぞ」
彼には絶対の自信があった。

「もうすぐだからな、僕に心を奪われるのは」
アディーナは自分に気付いているのはわかっている。そしてやきもきしていると思うと嬉しくてたまらなかった。
「もうすぐだからな」
そして目を離した。そしてパンと果物を食べ終えた。
「ふう、美味しかった」
彼は腹をさすって言った。実際に美味しいと満足していた。
そこにアディーナが出て来た。如何にも今来たばかりだという態度である。
「来たな」
ネモリーノは彼女を見て呟いた。
「いよいよだ」
そしてこれから起こるであろうと彼だけが確信していることに胸を打ち震わせていた。
「やけに嬉しそうね」
アディーナは内心の意地悪にも似た憤りの心を必死に抑えながら言った。
「私の忠告を聞き入れてくれたのかしら」
「まあね」
ネモリーノは鼻で笑った様に答えた。
「おかげで随分気が楽になったよ」
「それはよかったわ」
アディーナは答えた。だがその本心は全く違っていた。
(どういうつもりなのかしら)
顔は笑っていたが目は全く笑ってはいなかった。
(この私にそんな態度をとるなんて)
胸が怒りで燃え上がっている。だがそれは何とか隠している。
(見ていらっしゃい。死ぬ程後悔させてあげるから)
だがそれは流石に口には出さない。表情だけであるがにこやかな態度を崩さない。

「けれどまだ苦しいのではなくて」
「確かにね」
ネモリーノは満面に笑みを讃えて答えた。
「けれどそれもほんの少しさ。あと一日で消えるよ」
「あら、一日で」
「うん。それでもう僕は安息の日々に入ることができるのさ」
「それは良かったわ」
アディーナはこめかみをヒクヒクさせていた。
「心から祝ってあげるわ」
内心は今にも爆発しそうであったが。
(只じゃ済まさないわよ)
その心の顔は夜叉の様になっていた。だがやはりそれは表には出さない。
(そう、もう少しだ)
ネモリーノの内心は彼女のそれとは見事なまでに正反対であった。

第一幕その八

（もう少しで彼女の心は僕のものなんだ。明日にその心は僕のものだ）

彼はそれを信じていた。だからこそ強気なのだ。

「明日には綺麗さっぱり忘れているだろうね」

ネモリーノは得意そうに言った。

「明日には！？」

アディーナのその顔に一瞬だが夜叉の顔が浮かんだ。だがそれはあくまで一瞬のことであった。

「そう、明日には」

ネモリーノはそれに気付かなかった。もし気付いていれば臆病な彼がどれ程恐れたことか。

「本当なのね！？」

アディーナは顔を見上げて彼を問い詰めた。

「そうだよ」

ネモリーノはわざとすげない様子で答えた。

「信じていいのね、その言葉」

「僕が嘘を言ったことがあるかい？」

ネモリーノはやはりすげない様子である。

「ふうん」

彼女の顔に次第にその夜叉の面が浮かび上がってくる。しかしそれは何とか気付かれる域にまで持っては行かない。浮かび上がらないように苦労していた。

（どういうつもりなのかしら、本当に）

アディーナの怒りは募る一方であった。

（ここまで頭にきたのは本当に生まれてはじめてだわ）

彼女はこれまでにない怒りで身体を震わせていた。だが彼女は怒りのあまり一つのことに気付いていなかった。

自分が何故これ程までに怒りを覚えるのか。それについては思いが至らなかった。頭の回転の早い彼女であるが怒りのあまりそこまで考えがとても至らなかったのだ。
「ネモリーノ」
強い声であった。
「な、何だい！？」
その声に気の小さい彼は震え上がってしまっている。
「本当に明日までなのね」
「う、うん」
逆に彼の方が小さくなってしまっている。
「そうしたら僕は楽になるんだよ」
（君を手に入れることができてね）
この心の言葉は当然アディーナには聞こえはしない。だから彼女の攻撃はさらに意地の悪いものとなるのであった。
「わかったわ」
彼女は意地悪そうに微笑んだ。
（見ていらっしゃい、目にもの見せてくれるわ）
（落ち着け、ネモリーノ）
ネモリーノはそれに対して自分を落ち着かせるので精一杯であった。
（明日になれば御前は彼女の心を手に入れているんだぞ）
そう自分に言い聞かせながら落ち着きを取り戻した。
「それで明日には・・・・・・」
だがその声はまだ震えていた。
「明日には、何！？」
アディーナは怖い声で問い詰めてきた。
「それは・・・・・・」
ネモリーノは弱る。アディーナはさらに詰め寄ろうとする。だがそこにもう一人役者が姿を現わした。
「この村は可愛い娘がいていいが」

見ればベルコーレであった。
「どうも身持ちが固いな。やはり田舎の娘は攻めにくい」
どうやら村の娘達に言い寄って惨敗続きであるらしい。口を尖らせて不平を呟いている。
「あら」
アディーナは彼の姿を見て顔を明るくさせた。
「丁度いい時に」
ここで咄嗟に閃くものがあった。
ネモリーノを見た。彼が出てきて急に不機嫌になっている。
(決まりね)
そう思ってほくそ笑んだ。そしてベルコーレに顔を向けた。
「ねえ軍曹さん」
「何だい？」
「戦いの状況はどうかしら」
「思わしくないね。負け続きさ」
彼は力なく笑って答えた。
「すぐに挽回できると思うけれどね」
「今にも？」
アディーナは意味ありげに問うた。
「機会があればね。ただしその機会がないんだよ」
ここで彼女に目を向けた。
「機会がね」
何を言わんとしているかは明白である。アディーナにとって僥倖であった。
「それがここにあったら？」
横目でネモリーノを見ながら問うた。
「えっ！？」
ネモリーノはその言葉に一瞬我を失った。
「どれだけ貴方がここにいられるかが問題だけれど」
ネモリーノは必死に動揺を隠しながらベルコーレの次の言葉に耳

を澄ませた。
「どれだけかい」
「ええ。どれだけ？」
「一週間程だね」
「一週間ね」
アディーナは頷きながらネモリーノを見る。だが彼は完全に落ち着きを取り戻していた。ケロリとしている。
（おかしいわね）
アディーナは首を傾げた。それはベルコーレも気付いていた。
（この二人もしや）
ネモリーノとは違いこういうことの経験は多い彼である。事情はいささか読めてきた。
（俺は当て馬かも知らんな）
そう考えたがそれは顔には出さなかった。そしてアディーナに問うた。
「一週間あれば充分だと」
「わかったわ」
アディーナはそれに頷いた。ネモリーノを見るとまだ平気である。
（一週間か。驚いて損したよ）
ネモリーノは薬のことが頭にある。だから余裕を持っている。しかしアディーナはそんなことは知らない。だから余計に焦っているのだ。

第一幕その九

（まだ笑っているわね、完全に頭にきたわ）
もう怒りが顔に滲み出ていた。
（見ていらっしゃい、死ぬ程後悔させてやるから）
だがネモリーノはやはりしれっとしている。
（明日になれば全て変わるんだ。明日には僕はアディーナと一緒なんだ）
そう思うと笑わずにはいられなかった。
（この男が馬鹿なのはわかるが）
ベルコーレは少し考えていた。
（それでもこの娘さんの様子は少し変だな。大体俺が独身かどうかすら確かめてはいないのに）
彼は幸いにして独身である。アディーナにとってこれは幸運なことであった。この場限りであるが。
（やっぱり何かあるのかな）
そう考えている時だった。ジャンネッタがこの場に姿を現わした。
「ねえ軍曹さん」
そしてベルコーレに呼びかけてきた。
「私かい？」
「はい。兵隊さん達が御用があるそうです」
見れば彼女の後ろに兵士が数人続いていた。
「御前達か。一体どうしたのだ？」
「ハッ、只今軍曹宛に大尉から連絡がありました」
「大尉からか」
「はい」
敬礼をして答える。そしてその中の一人が一通の手紙を差し出した。
「どうぞ」

「うむ」
彼は封を切り読みはじめた。それを見て彼は難しい顔をした。
「予定変更か。こういうことはよくあることだが」
だが面白くはなさそうであった。
「おい、全員に伝えろ」
読み終えると彼は兵士達に対して言った。
「明日の朝この村を発つ。そして本隊と合流するぞ」
「わかりました」
彼等はそれを聞いて敬礼で答えた。
「命令だから仕方がない。わかったわ」
「はい」
兵士達は納得しているようである。心中は穏やかではないかも知れないが彼等も軍人である。これはわきまえていた。
「お嬢さん」
ベルコーレは命令を終えるとアディーナに顔を向けた。
「こういうことだ。悪いが明日にはお別れだ」
密かに厄介ごとに巻き込まれなくてよかったと思っていた。
「それじゃあね」
(さっさと行っちまえ)
ネモリーノは厄介者が消えたと思い大喜びであった。
(明日にはあんたにとびきりのいいニュースが入るからな。それを持って早くこの村から出て行ってくれ)
かなり都合のいいことを考えていた。だがそうは問屋が卸さない。
(まだ喜んでいるのね)
アディーナが怖い顔をして彼を睨んでいたのだ。
「軍曹さん」
彼女はベルコーレに声をかけた。
「今日一日は大丈夫なのね」
「まあね」
彼は答えながら心の中でバツの悪い顔を作っていた。

（まずったかな）
舌打ちしたかったが目の前にその舌打ちの先がいるのでそれは無理であった。
「わかったわ」
アディーナはそれを聞いて満足気に微笑んだ。
「じゃあ今日結婚しましょう」
「ええっ！？」
これにはネモリーノとベルコーレ、両方が同時に声をあげた。
「嘘だろう！？」
言われたベルコーレは目を白黒させていた。
「本気なのかい！？」
「冗談でこんなことは言わないわよ」
アディーナはそれに対して微笑で返した。
「それとも私じゃご不満かしら」
「いやいや、とんでもない」
だがベルコーレは内心とんでもないことになった、と思っていた。
（逃げられんな、これは）
彼はそれでも騒ぎの中央ではまだなかった。かなり巻き込まれていたが台風の中央にはいなかった。
中央は最早大荒れであった。ネモリーノは顔中汗だらけにしてアディーナに何か言おうとしていた。だが狼狽しきっていて中々言葉にならない。
「あの、アディーナ、あの、その・・・・・・」
「何、ネモリーノ」
アディーナはそんな彼を勝ち誇った顔で見下ろしていた。背は彼女の方が遙かに小柄であったが完全に勝っていた。
「貴方も来てくれるわよね、楽しみに待ってるわよ」
ここぞとばかりに攻勢をかける。ネモリーノは顔色をくるくると変え口を閉じたり開いたりして完全に我を失っていた。
「あの、その」

「何？聞いてあげるわよ」
「その、ね・・・・・・。明日の朝まで待ってくれないかな、その、結婚を」
「あら、どうして？」
彼女は意地悪い顔で問うてきた。
「貴方に関係ないことなのに」
（関係あるのだろうな）
ベルコーレはその光景を見ながら思った。
「明日になればわかるよ、事情は。今はちょっと言えないけれど。だからね・・・・・・その結婚は明日まで待って欲しいんだよ、頼むから」
「嫌よ」
アディーナはそれに対してすげなく返した。
「貴方に指図されるいわれはないわ」
そして右手を振って彼をあしらった。
「そんな・・・・・・」
ネモリーノはそれを受けて完全に絶望した様子になった。もう酔いは完全に醒めていた。
（さてさて）
ベルコーレはそれを見ながら考え込んでいた。
（これはどうなるかな。どうもこの娘さん本当は俺のことは何とも思ってはいないようだな）
こうしたことには場慣れしている。だからすぐにわかった。
（俺は当て馬ということかな）
そう考えた。だがここは結論を避けることにした。
（乗ってみるか）
それも楽しそうだと思った。酔狂なことは好きだった。
（よし）
彼は意を決した。この騒動に巻き込まれることにした。
「ではお嬢さん、すぐに式に取り掛かりましょう」

「ええ」
アディーナはにこやかな笑顔を作って答えた。
「すぐに取り掛かりましょう」
「それは一日だけ待ってくれ」
ネモリーノはそんな彼女にすがるようにして言った。
「そうしたら全てわかるから」
「何がわかるっていうの！？」
アディーナはそんな彼をキッと睨み返した。
「貴方が馬鹿だってことはとっくの昔にわかってるわよ」
（これはまた手厳しい）
ベルコーレはそれを見てまた思った。やがてこの場に仕事を終えた村人達と荷物を整え終えた兵士達がやって来た。
「おや、またネモリーノか」
村人達は彼が慌てふためいているのを見て呟いた。
「またアディーナに言い寄って」
「いつも振られているんだからいい加減諦めたらいいのにね」
彼等はクスクスと笑いながらそう話をしている。兵士達はそれを興味深そうに聞いている。
「今度は一体何だ」
「どうせまた馬鹿なことをしてアディーナを怒らせたんだろう」
彼のことは村では有名であった。やはり何処か抜けているので村人達にも困ったものだと思われているのである。
「さあ軍曹さん」
村人と兵士達が彼等を遠巻きに見守る。アディーナはそれを背にベルコーレに対して言った。
「早速公証人のところへ行きましょう」
「わかりました」
ベルコーレは恭しく敬礼をして答えた。
「ではすぐに」
「ど、どうしよう」

ネモリーノはそれを見てさらに狼狽の色を深めた。
「そうだ、こういう時には先生だ」
ふとドゥルカマーラのことを思い出した。
「先生なら何とかしてくれる」
辺りを必死に見回す。だがここにいる筈もない。
「一体何処に」
「またわけのわからないことをしているな」
村人達はそんな彼を見て言った。
「いつものことだがあいつのあれは変わらないな」
「悪い人じゃないのにね」
「本当」
笑いながら彼を見ている。だがネモリーノには目に入らない。
「さて、どうするのかしら」
アディーナは勝ち誇った目でそんな彼を見ている。
「私を怒らせたんだから当然よ。精々苦しみなさい」
悠然と慌てふためく彼を見下ろしている。だがすぐにその目の色は変わった。
「そして反省したら許してあげる。それまで精々困りなさい」
ネモリーノは狼狽し慌てた様子のままその場を後にした。村人達はそんな彼を呆れて、そして困ったような笑いを浮かべて見送った。
「本当に困った奴だよ」
最後にこの言葉が何処からか聞こえてきた。

第二幕その一

第二幕　愛すべき山師

さて騒ぎの後アディーナとベルコーレは本当に式を挙げることになった。場所は彼女が持っている農場の中である。

やはり彼女はそれなりに裕福な家のようである。本が読め、持っているのだからそれは当然であるが。かなり広い農場である。

「皆さんようこそ」

彼女は招待されてきた村人達に挨拶をした。服はそのままである。すぐに決まったことなので花嫁衣裳を着る時間はなかった。それに彼女も着るつもりはなかった。そこまでは考えていなかったのだ。

兵士達も楽器を手に来ている。どうやら彼等は本来は軍楽隊であるようだ。

「私も楽器は弾きますぞ」

ベルコーレは得意そうに言った。

「笛にバイオリン、それに歌も歌うことができます」

「おお、それは素晴らしい」

村人達はそれを聞いて称賛の声をあげた。

「ではあとで一曲頼みたいところですな」

「喜んで」

ベルコーレはにこやかな顔でそれに応えた。

「これから神聖な式がはじまりますからな。自分を祝って歌わせてもらいましょうか」

「どうぞ」

村人達も彼の歌を期待する言葉をかけた。ベルコーレはそれを受けてさらに上機嫌となった。

村人達も兵士達も上機嫌であった。だがアディーナは一人面白くなさそうである。

「どうしたの？」

そんな彼女にジャンネッタが声をかけた。
「この華やかな式の主役なのに」
「何でもないわ」
アディーナはそう言って誤魔化した。だが心はここにはなかった。
（いないわね）
彼女はある男を探していたのである。
（いないと面白くないのに）
どうやらネモリーノを探しているようである。彼女にとっては彼がいないと話にならない。探したがやはり何処にもいない。
諦めて式の中央に入った。そこに招かれているドゥルカマーラが来た。
「やあやあこの度はどうも」
彼はこの話の成り行きを知らない。知っていても人事で済ませるであろう。
それが山師だからだ。そういう意味で彼はプロと言えた。
「まさか花嫁を見ることができるとは思いませんでした。これは何より」
「有り難うございます」
アディーナはそんな彼の言葉に頭を垂れた。
「先生にも祝って頂けるとは何よりです」
「ほほほほほ」
ドゥルカマーラはそれを受けて上機嫌に笑った。
「ではこの二人のこれからの幸せを願って私も披露したいものがあります」
「それは何でしょうか」
村人達が尋ねた。
「何だと思います？」
彼はここで逆に尋ね返してきた。
「ううん」
村人達はそれを聞いて考え込んだ。

「わかりません」
「一体何でしょうか」
「外国の歌です」
「外国の歌！？」
「左様。先にも言いましたが私はあちこちを回っておりまして。そこで覚えた歌なのですが」
「一体どんなものですか？」
「はい、男と女、二人で歌う歌です。詩と楽譜はここにあります」
そう言って懐からそれを取り出した。
「これはまた用意がいい」
村人達も兵士達もそれを見て称賛の声をあげた。
「では私が指揮を執りましょう」
ベルコーレが進み出て言った。
「ではお願いします」
ドゥルカマーラはそれに従い彼に楽譜を渡した。
「ほう」
ベルコーレはそれを開いてその中をパラパラと見た。
「これはよさそうだ」
「そうでしょう、私のお気に入りの歌ですから」
ドゥルカマーラは得意そうに言った。
「そして詩は私が。歌うのはこれは花嫁と決まっていまして」
「私がですか？」
「はい。如何ですか」
「そうですね」
アディーナはそれを聞いて少し考え込んだ。
「喜んで」
そしてそれを承諾した。
「受けて頂き有り難く思います」
ドゥルカマーラはにこやかに笑ってそう応えた。そして歌ははじまった。

「行くぞ」
ベルコーレは兵士達を前に指揮棒を執った。中々さまになっている。
楽譜を開いた。そして棒を振りはじめた。
兵士達が楽器を奏ではじめる。すぐに楽しそうな曲が流れてきた。
「さあ娘さん」
まずはドゥルカーラが歌いはじめた。意外と美声である。
「わたしゃ金持ち、あんたは美人。そんなあんたは何がお望みかね？」
歌も上手い。軽快なリズムに乗り軽やかな動作も入れて歌う。
「お気持ちは嬉しいけれど」
アディーナも歌いはじめた。彼女も歌が達者だ。
「私はしがない女船頭、貴方には似合わないわよ」
彼女はここで自分がネモリーノにいつも言う言葉を思い出した。
「そんな固いことを言わないでおくれ」
ドゥルカマーラはにこやかに笑いながら歌う。
「私には過ぎたことよ」
アディーナは返す。歌は次第に乗ってきた。
「面白い歌だな」
「そうなるのかな」
村人達は酒や料理を楽しみながらそれを聞いている。見れば兵士達と共に行う予定だった宴をそっくりここでしているようである。
「娘さん、世の中お金ですぞ」
ドゥルカマーラは歌を続けた。
「お金さえあれば何でも適う、愛は軽くて吹けば飛ぶがお金は重くて残りますぞ」
（ネモリーノと反対のことを言うわね）
アディーナはまた思った。だがそれをおもてに出すことなく歌を続けた。
「けれど私には好きな人がもういますので」

「まあそんな固いことを言わないで」
「私には過ぎたこと」
二人は歌で丁々発止のやりとりを続ける。次第に歌の調子がクライマックスに近付いてきているのを教えていた。
「わしを幸せにしておくれ」
「それは駄目よ。愛はお金にはかえられないわ」
それで歌は終わった。結局愛は金なぞよりも遙かに大切なのだということであった。

第二幕その二

「お見事！」
歌が終わると村人達はドゥルカマーラに拍手を送った。
「素晴らしい！」
「まさかこれ程までとは！」
「いやいや」
ドゥルカマーラはほくほくとした顔で村人達に応えた。
「私めは色々回っておりましてな。そこで多くの芸を身に着けておるのです。これはその中のほんの一つに過ぎません」
（一番得意なのは口でのやりとりじゃがな）
やはり食えない男であった。だが村人達はそれに気付きながらもあえて知らないふりをしていた。彼等も中々したたかである。
そこに公証人が来た。彼は書類を手にしている。
「丁度よいところに」
ドゥルカマーラが彼を迎えた。
「では早速サインをしますかな、御二人さん」
「はい」
ベルコーレはにこやかに頷いた。
「私は何時でもいいですよ」
「左様ですか。では花嫁さんの方は」
「私ですか？」
アディーナはドゥルカマーラの言葉に少しギョッとした。
「ええ。他にどなたがおられます？」
「そ、そうですね」
彼女は不意に視線を泳がせた。そしてその場を見回した。
（こんな時に限っていないわね）
そして内心舌打ちせずにいられなかった。
（いないと話にならないじゃない。折角ここまできたのに）

彼女は口の中を噛んで眉を顰めていた。如何にも不機嫌そうな顔であった。
「ん！？」
それに最初に気付いたのはベルコーレであった。彼はやはり、と思った。しかしそれはやはり心の中だけに留めておいた。
「どうしたんだい？」
そして不思議そうな顔を作ってアディーナに問うた。
「いえ、何も」
アディーナは咄嗟に誤魔化した。だが心中穏やかではない。
やはりネモリーノは見えない。アディーナはそれが気になって仕方がないのだ。
「どうも様子がおかしいのう」
それはドゥルカマーラも察した。やはり頭の回転は早い。
彼はアディーナを見ながら場の端にあるテーブルに座った。今のところ誰も彼に注意は払っていない。
「何時見てもこうした場はよいのう。若い頃を思い出すわい」
どうやら彼も結婚していたことがあるらしい。だがそれが結婚詐欺の可能性も否定できない。それが彼の胡散臭さであった。
その真相はともかく彼は気分よくその場で酒と食事を口にしだした。だがここで彼の肩をツンツン、と叩く者がいた。
「ん！？」
彼はそちらに顔を向けた。見ればネモリーノがいた。
「御前様も来ておったのか」
ドゥルカマーラは彼を認めて言った。
「一緒にどうかね」
そして杯を勧めた。だがネモリーノはとても酒を楽しむような状況ではなかった。
顔は真っ白であった。絶望に沈んだ表情で肩をガックリと落としていた。
「どうなされた、このような場でそれはあまりにも場違いですぞ」

ドゥルカマーラはそんな彼を励ます言葉をかあけた。だがネモリーノはそんな言葉は耳に入らないようであった。
「あの、先生」
彼はアディーナの方をチラチラと見ながら口を開いた。
「今すぐに愛される方法はありますか？」
（何かあったようじゃな）
ドゥルカマーラはそれがアディーナのことだとは知らない。だが彼の沈んだ様子を見て相変わらず恋煩いだとはわかった。
（どうせ間の抜けたことでもしでかしたのじゃろう。やっぱりこの若者は尋常でない間抜けじゃな）
そう思いながらも彼はネモリーノの相談に乗ることにした。自分の利益になるように。
「ではあの薬をもっと飲みなされ」
「それで彼女に愛されますか？すぐに」
「うむ、すぐにな」
（もうすぐこの村とおさらばじゃ。好きなだけホラを吹いておくか）
内心クスクス笑いながら答える。
「それでたちどころに女の子達に取り囲まれますぞ」
「よし」
ネモリーノは決めた。そして申し入れた。
「先生、もう一瓶！」
「わかりました」
そして彼は右手を差し出した。
「お代を」
「うっ・・・・・・」
ネモリーノはそれを聞いて言葉を詰まらせた。
「今持ち合わせが・・・・・・」
「では持って来なされ。酒場で待っておりますからな」
「本当ですか！？」
「さっきも言いましたがわしは嘘は言いませんぞ」

「わかりました」
ネモリーノはそれを聞いて大きく頷いた。
「では酒場で待っていて下さい。すぐにお金を持って来ます！」
そして彼は走り去った。
「やれやれ」
ドゥルカマーラはその後ろ姿を見送って肩をすくめた。
「気はいいがどうも頭の回転が鈍い御仁じゃのう。あれでは後々苦労するじゃろうな」
そう言いながらもネモリーノが気にいりだしていた。
そんな彼を少し待ってみる気になった。彼はゆっくりと席を立った。その前ではアディーナが公証人にサインを少し待ってくれるよう主張していた。

第二幕その三

「まあこうなると思っていたがな」
式はとりあえず休憩に入った。ベルコーレはそこから離れ広場に涼みに来ていた。
「俺は多分当て馬だろうな。あの娘の本命は別にいる。それは多分」
考えに耽っているところにネモリーノが来た。やはり肩を落とし絶望しきった顔をしている。
「家の何処にもないなんて・・・・・・」
彼は項垂れたまま歩いていた。
「どうしたんだ、何時使ったんだろう」
そうやら家にお金がなかったらしい。彼はこの時忘れていたがそのお金は全て隣の叔父さんに見舞いとして全て渡していたのだ。気がいいが物忘れの激しい彼はそれをすっかり忘れていたのだ。
「どうしよう、このままじゃ僕は」
「その本人が来た。また落ち込んでいるな」
ベルコーレはネモリーノを認めて呟いた。そして彼に声をかけることにした。
「おいそこの若いの、一体どうしたんだ!?」
事情はわかっている。
「そんなに落ち込んで。何があったんだ!?」
「いえ」
ネモリーノは顔をあげた。見ていられない表情であった。
「お金がなくて。どうしたらいいか」
「お金がない」
「はい。それでどうしたらいいかわからないんです。今すぐに必要なんですが」
「今すぐ」
(また馬鹿なことをしようとしているな)

ベルコーレはそれを聞いて思った。
（どうせあの娘のことだろう。何に必要なのかは知らないが）
だがここで見捨てるのも気の毒に思えた。彼は進んでこの喜劇に参加しているのだしネモリーノに対しても悪感情はない。ならば助けてやろうと思った。
（どうせ明日になればここを離れるんだ。ならばここは援助してやるか）
彼は決めた。そしてネモリーノに対して言った。
「そんなに必要なのかい？」
「はい」
彼は項垂れたまま答えた。
「どうしても今すぐ必要なんです」
「わかった」
ベルコーレは頷いた。そしてネモリーノに対して言った。
「ならばうちの隊に入るがいい。すぐに金が手に入るぞ」
「本当ですか！？」
「ああ。二十スクードだ。どうだい？」
「二十スクード」
ネモリーノはそれを聞いて顔を下に向けて考えだした。
「今すぐ手に入るぞ。どうだい？」
（どのみちその体格じゃ検査しても受かるかどうかわからないがな。まあそれは経費で落としてやるか）
ベルコーレは彼の丸々と太った体格を眺めながら心の中で呟いた。とても兵隊になれるとは思っていなかった。
「うちの隊は軍楽隊だ。前線にも出ないしいいものだぞ」
「けれど僕は楽器は」
「荷物運びならいいだろ。どうだ、悪くはないだろう」
「はい」
彼は力なく答えた。
「それに軍隊には名誉と栄光があるぞ」

「はあ」
また力のない答えだった。臆病な彼は戦争も軍隊も嫌いであった。戦場に行って死ぬのは絶対に嫌だと思っていたし、そうでなくとも軍隊での厳しい命令で殴られたりするのも怖かった。やはり軍隊には不向きであった。
「しかも女の子にもモテモテだ。いいことづくめだぞ」
「けれど僕は」
「お金が欲しいのだろう？」
ベルコーレはここでまた問うた。
「確かにそうですが」
「なら迷うことはないだろう、すぐに入隊の願書にサインするんだ。それだけで二十スクード入るぞ」
「すぐに」
「そうだ。そうすれば明日から御前さんはもてもての軍人だ」
（絶対検査で落ちるに決まっているがな。その時は借金にさせてもらおう）
流石に善意で金を渡すつもりはないようである。わりかししっかりとしている。
（明日からここともお別れか）
ネモリーノは周りを見渡して思った。
（叔父さんとも、村の皆とも。そして）
やはり彼女の顔が頭に浮かんだ。
（アディーナとも。けれどそれしかないんだ）
彼でも現実はわかっていた。いや、わかっているつもりであった。
（アディーナを僕のものにする為には）
「どうだ、決めたかい？」
ベルコーレはまた問うた。
「すぐだぜ」
（そうでなきゃ借金にさせてもらうがな。二十スクード位何とかなるだろう）

彼はネモリーノを誘う。執拗な程だ。
（早く決めろ、そうすりゃ御前さんは助かるんだぞ）
心の中の言葉は決して言わない。ネモリーノもそれを知るよしもない。
「二十スクードなんですね」
ネモリーノはここで顔を上げて問うた。
「そうだ、二十スクードだ」
ベルコーレは答えた。それを聞いてネモリーノはようやく決心した。
「わかりました」
「よし」
ベルコーレはそれを受けて頷いた。そして懐から一枚の紙とインク、そしてペンを取り出した。
「これにサインしてくれ。そうすれば二十スクードは御前さんのものだ」
「はい」
ネモリーノはペンを受けた。そして書類を手にする。しかし。
「あの、すいません」
実は彼は字が書けないし読めないのだ。ベルコーレはそれを見てニヤリと笑った。
（これで落選は確実だな）
彼はここで嘘を教えることにした。

第二幕その四

「ああ、読み書きが出来ない奴の為のサインもある。マルを書いてくれればいい」
「マルですね」
「ああ」
（本当は十字だがな。マルは拒否のサインなんだよ）
ベルコーレは内心舌を出していた。彼はこれで自動的に二十スクード手に入れたことになった。
「よし」
ベルコーレはサインをされた書類を受け取って大いに満足して頷いた。
「これで御前さんは立派な兵隊だ。俺を手本にすればすぐに伍長になれるぞ」
（通らないがな）
「はあ」
だがネモリーノの返事は力のないものであった。
（こうするしかなかったんだ）
ネモリーノは弱々しい声で内心呟いた。
（アディーナにはわからないだろうな、僕がどれだけ苦しんでいるか。けれどいいや）
もうサインはした。今更何を言ってもはじまらない。
（すぐに先生のところに行こう。そして薬を貰うんだ。そうすればアディーナは一日だけれど僕のものだ）
「じゃあ明日ここを発つぞ、心の準備をしておけよ」
「はい」
「楽しい軍隊生活だ。旅と酒と美女が御前さんの永遠の友達だ。軍楽隊だから戦場に出ることもまあないしな」
「それはいいですね」

「だから元気を出せ、御前さんはもう立派な兵隊なんだからな」
(明日除隊だけれどな)
しかしベルコーレの声はネモリーノの耳には入らなくなってきていた。彼は沈んだ顔で俯いていた。
(これでいい、アディーナの気持ちが僕に向いてくれるんだから)
そして彼は金を受け取るとすぐにドゥルカマーラのところに向かった。ベルコーレは彼の後姿を笑いをこらえながら見送っていたがやがてそこから消えた。その入れ替わりにジャンネッタがやって来た。
「誰もいないのかしら」
彼女は辺りを見回した。
「誰かいない？」
すると向こうから娘達がやって来た。式の間ですることもなくおしゃべりに興じている。
「あ、いたいた」
ジャンネッタは彼女達の姿を認めてそちらに駆けてきた。
「あら、ジャンネッタじゃない」
娘達は彼女の姿を認めてそちらに顔を向けた。
「一体どうしたの？」
「凄いニュースがあるのよ」
「凄いニュース！？」
彼女達はそれを聞いて首を少し前に出した。
「聞きたい？」
ジャンネッタはそれを聞いて思わせぶりに尋ねた。
「勿論」
皆それに答えた。これで話は決まった。
「いいわ、じゃあよく聞いてね」
「ええ」
娘達は彼女を囲んだ。そして聞き入る姿勢に入った。
「ネモリーノの叔父さんなんだけれどね」

「あの今にも危ないっていつ隣村の叔父さんね」
「ええ。実はね、昨日亡くなったらしいのよ」
「それ本当！？」
「本当よ、さっき隣村から来た人に聞いたから。間違いないって」
「前から危なかったからね。それでどうなったの？」
「あの人遺産たっぷり持ってたわよね」
「ええ」
「それでね・・・・・皆よく聞いてね」
ジャンネッタはここで皆を側に寄せた。そして小さな声で囁いた。
「その遺産が全部ネモリーノに相続されることになったのよ」
「それ本当！？」
皆それを聞いて思わず叫んでしまった。
「静かに」
ジャンネッタはそんな彼女達を窘めた。そして再び自分の側に寄せた。
「まだ皆に言っちゃ駄目よ、あくまで私達だけの秘密」
「いいわ」
皆彼女のその言葉に頷いた。
「今やネモリーノはこの辺りで一番の大金持ち、結婚するなら今よ」
「性格はいいしね」
「頭は回らないけれど」
彼女達はそんな話をコソコソとしていた。そしてネモリーノを探しにその場を後にした。
その時ネモリーノはベルコーレから得た二十スクードの金でドゥルカマーラから金のぶんだけの薬を貰った。そしてそれをすぐさま飲み自宅のすぐ側にいた。
「これでもう問題はない筈だ」
彼は顔を真っ赤にしていた。
「先生も太鼓判を押してくれた、どんな美女でも僕に惚れる、って。お金を手に入れた介があるってものだ」

薬の力を信じて疑わなかった。
「すぐここを出ていかなくちゃならないんだ。すぐに」
そして自分の家を見た。
「御前ともお別れだな。辛いよ、本当に。だけれど」
ネモリーノは悲しそうな顔で言葉を続けた。
「僕にはこうするしかなかったんだ、こうするしか。だから許しておくれ」
そしてまた薬を口にした。そうでないとやっていられなかったのだ。
塞ぎ込むネモリーノの所に娘達が顔を出してきた。
「いたわ」
先頭をいくジャンネッタが彼女達に対して囁いた。
「用意はいいわね」
「ええ」
彼女達はそれに対して頷いた。そしてネモリーノの前にやって来た。
「ねえネモリーノ」
そして彼に声をかけた。
「何だい？」
彼は赤い顔で彼女達を見上げた。
「見た、この顔」
ジャンネッタがそれを見て娘達に言った。
「ええ、見たわよ」
彼女達もそれに頷いた。

第二幕その五

「いいお顔してるわよね」
「本当、こんな立派な人そうそういないわよ」
彼女達は笑みを浮かべながらそう言い合っている。
「立派な顔だなんて」
ネモリーノもそれに驚いている。彼も自分の顔は知っている。お世辞にも男前だとは思ってはいなかった。
「皆一体どうしたんだい！？」
（まさか）
彼はそう言いながらも思った。
（もしかして薬が効いてきたのかも）
そう思うといてもたってもいられなかった。立ち上がって尋ねた。
「皆、本気なのかい！？また僕をからかってるんじゃないだろうね」
「まさか」
「冗談でこんなこと言わないわ」
彼女達は答えた。ネモリーノにはとても冗談には見えなかった。
（ううん）
彼はそれを聞いてまた考えた。嘘には思えない。無論お世辞にも。少なくとも彼にはそう思えた。
（間違いない、薬が効いてきたんだ）
彼は確信した。これも願いは適ったのだと思った。
娘達はそんな彼の周りに集まりだした。ネモリーノはそれを上機嫌で見ていた。
（やったぞ、これでアディーナは僕のものだ！）
彼は兵隊にとられることも忘れて喜びに支配された。そしてこれから起こることに思いを馳せていた。
「はて」
そこに騒ぎにつられてドゥルカマーラがやって来た。

「あの騒ぎは一体何じゃ」
見ればネモリーノがいる。
「またあの若者か。何かと人騒がせな御仁じゃ」
だがそれまでと様子が全く違う。何と若い娘達に囲まれて上機嫌であいるのだ。
「何と」
ドゥルカマーラはそれを見て目を瞠った。
「本当に娘達に囲まれておるわ。これは一体どういうことじゃ！？」
あの薬がインチキであることは彼が一番よく知っている。その薬が効いている筈がないのだ。
「おかしいのう、そんな筈はないのじゃが」
「あ、先生」
ネモリーノがここで彼に気付いた。そして娘達から離れて彼のところに来た。
「有り難うございます、おかげで願いが適います。これも全て先生のおかげです」
（むむ）
ドゥルカマーラは彼を見て内心色々と思った。
（まさか本当じゃったのか？いや、幾ら何でもそれは）
考え込んでしまう。どう考えても唯のワインにそんな効果がある筈がない。
しかしそんなことを言える筈もない。彼はここはいつものインチキとハッタリに徹することにした。
「ほっほっほ、そうじゃろそうじゃろう」
彼は顔を崩して笑った。
「何せわしが丹精込めて作った薬じゃからな」
（丹精込めて入れ替えただけじゃがな）
とりあえずは自分の功績にした。だが実際は不思議で仕方ない。
（様子を見るか、暫くは）
今までの経験でそうすることにした。ここでまた騒ぎにつられて

人が来た。アディーナであった。
「えっ！？」
彼女は目の前の光景を見て思わず我が目を疑った。
「これは一体どういうこと！？あのネモリーノが」
ネモリーノはまた娘達に囲まれていた。それでアディーナには気付かなかった。それでも彼は喜んでいた。
（アディーナもすぐ来るさ、そして僕の側に）
だがそう浮かれるあまり実際に彼女が来ても気付かなかったのだ。滑稽な事態であった。
「先生」
アディーナは側にいたドゥルカマーラに顔を向けた。
「一体何事ですか！？」
（おや）
ドゥルカマーラは彼女を見てそこに他の娘達とは違ったものを感じた。
「いや何」
だが今はそれについて思いを巡らさずアディーナの話に答えることにした。
「あの若者はわしの薬を飲んだのじゃ」
「薬を！？」
「そうじゃ、愛の妙薬をな」
「愛の妙薬」
それを聞いたアディーナの眉が怪訝そうに歪んだ。
「うむ。飲めばどんな娘にも惚れられるという魔法の薬じゃ。わしの誇る自慢の薬じゃよ」
「そうなのですか」
「うむ。普通は飲んでから一日経ってから聞くのじゃがのう」
「一日」
アディーナはそれを聞いてハッとした。ネモリーノの言葉を思い出したのだ。

（まさかあの時私に一日だけ待ってくれって必死に頼んでいたのは）
彼女は事の真相がわかってきた。
「ところがのう」
だがここでドゥルカマーラがまた言った。
「あの若者はすぐに効いて欲しいとまた買ったのじゃ。たっぷりとな」
「たっぷりと」
「そうじゃ。かなり切羽詰っておったな。それでお金を作ってわしのところにまた来た」
「お金を作って」
「そう、兵隊に志願しての」
「兵隊に！？」
アディーナはそれを聞いて思わず声を挙げた。だがすぐに口を閉ざした。しかしそれはネモリーノには聞かれていなかった。
「ネモリーノ、あっちへ行きましょう」
ジャンネッタ達が彼を誘っていた。
「木の下で舞踏会。皆で踊りましょうよ」
「うん」
ネモリーノは口元も目元も極限まで緩めてそれに応えた。
「行こう、そして皆で踊ろうよ」
「ええ」
そして彼等はネモリーノの家から少し離れた木の下に向かった。
その場にはアディーナとドゥルカマーラだけになった。
「先生」
アディーナはあらためて彼に尋ねた。
「それは本当の話なんですか！？ネモリーノがそんなことを」
「本当です」
ドゥルカマーラは答えた。

第二幕その六

「彼自身がそう言ってました」
「何と」
アディーナはそれを聞いて言葉を失った。
「とにかくすぐにお金が欲しかったようですな」
(まあどう考えても検査で落とされるじゃろうが。あれは借金にでもなるかのう)
心の中の言葉はここでは伏せた。
「お金が」
「はい」
「けれどネモリーノは今家にそれ程お金があるわけでもないし」
「どうやら兵隊に志願したようで」
ドゥルカマーラはタイミングを見計らって言った。
「兵隊に!?」
アディーナはそれを聞いて思わず声をあげた。
(おや)
ドゥルカマーラはここで気付いた。
(どうやらあの若者の想い人といのは)
頭の回転の早い彼のことである。すぐに結論を導き出した。
「娘さん」
そしてアディーナに問い掛けた。
「そんなに心配ですかな」
(少し露骨じゃったかのう)
彼は心の目でアディーナの動きを見張った。
「それは・・・・・・」
見ればアディーナは狼狽の色を濃くしていく。
「先生」
もうその狼狽を抑えることが出来なかった。彼女は不安に満ちた

顔でドゥルカマーラを見上げた。
「その話、嘘ではありませんよね」
「はい」
ドゥルカマーラは如何にも他人事のように答えた。
「何しろ本人の言葉ですから。嘘ではないでしょうな」
「ネモリーノは嘘なんか言わない」
（おやおや）
ドゥルカマーラはその言葉を聞いて目を細めた。
（これはかなり気にしておるな）
彼はここで更に攻勢に出ることにした。
「兵士になれば戦場に立つ。銃弾と砲弾が飛び交う戦場へ」
「要領の悪い彼がそんなところに行ったら」
「戦場では要領が悪いと危ないですな」
「死・・・・・・」
アディーナの顔が蒼ざめる。ドゥルカマーラは他人事の様に続けた。
「戦場ではよくあることです。何しろ戦場は殺し合いの場所ですからな」
「ネモリーノがそんなところに行ったら。気の優しい彼が行ったら」
アディーナの顔はさらに蒼くなっていく。もう白くなっている。
（もうすぐじゃな）
ドゥルカマーラはここで切り札を出すことにした。
「それ程気になりますかな、あの若者が」
「はい！」
アディーナは強い声で切り返した。それが何よりも彼女の心を物語っていた。
「先生、何とかなりませんか！？早く彼を救わないと」
「その言葉、偽りではありませんな」
ドゥルカマーラはあえて神父の様な口調で問うた。
「こんな時に嘘なんて言いません」

アディーナはキッとした声で言った。
「それなのにどうしてあんなに上機嫌で。やけになったのかしら」
「それが私の薬の効き目です」
ドゥルカマーラは言った。
「薬の」
「はい。あの若者は最初に私から薬を買った時にこう言いました。たった一人の娘の為に飲むのだと。どんな女性の心も支配できるというのに」
（私のことだわ！）
「イゾルデの魔法の薬が欲しいと言いましてな。それで私はあの若者に差し上げたのです」
「そんなことを」
「はい。私はどんな薬も作り出すことができますので。当然その愛の妙薬も」
（だからあの時あんなに上機嫌だったのね。それなのに私は）
アディーナは悔やんだだが悔やんでも悔やみきれるものではなかった。
「しかしそれでも駄目だったようで。それで彼は自分を軍に売って金を作ったのです」
「そして薬を買ったのですね」
「はい。それでそのお金のぶんだけ飲んだのです。するとああして娘達に囲まれまして。いやはや、自分で作ったのですが凄い効き目ですな」
（知らなかった、彼がそれ程私のことを想っていたなんて）
彼女は今までそれはほんの一時の迷いだと考えていたのだ。
（それなのに私はいい気になって冷たくして。何ということをしてしまったのかしら）
（ふむ）
ドゥルカマーラはその間も彼女から目を離してはいなかった。
（どうやら上手くいきそうじゃな）

思わず笑みがこぼれる。だがそれはすぐに消した。
「お嬢さん」
そしてアディーナにあえて優しく問いかけた。
「貴女の悩み、私が解決しましょうか」
「先生が！？」
「はい」
ドゥルカマーラは恭しく答えた。
「今苦しいのでしょう」
「ええ」
否定することはできなかった。

第二幕その七

「どうすれば彼を救えるのかしら」
「そんな時こそ私の薬です」
「先生の」
「そうです、そんなことは新しい愛を見つければすぐに収まります」
（こう言ったらどうなるかのう）
ドゥルカマーラはここであえてアディーナを挑発するようなことを口にした。
「新しい愛」
アディーナはすぐにその言葉に眉を顰めさせた。
（よしよし）
ドゥルカマーラはそれを見て内心満足気に笑った。彼の思うとおりであった。
「もてたいでしょう」
「いいえ」
アディーナは首を横に振った。
（そら乗ってきたな）
ドゥルカマーラは勝利を確信した。さらに言葉を続ける。
「大金持ちの殿方なぞは」
「お金なら困っていませんから」
「貴族の子弟は」
「柄じゃありませんわ」
「では美男子は」
「興味ありません」
「ふむ」
ドゥルカマーラはここでまた考える演技をした。そして間を置いてまた言った。
「ではどなたがいいのですかな」

「決まっているでしょう」
アディーナは毅然とした声で言った。
「私が欲しい人、それは」
「それは」
ドゥルカマーラは何もわかっていない素振りで問うた。
「ネモリーノだけです」
「あの若者だけですか」
「はい、私はその他には何もいりません」
「そうですか、ならば話が早い」
ドゥルカマーラは笑いながら言った。
「それでは私の薬を」
「先生の」
「左様、あの若者に渡したものと同じものを。これで貴女も救われますぞ」
「折角ですけれど」
アディーナはここでどういうわけか不敵な笑みを口に浮かべた。
(おや!?)
ドゥルカマーラはここで目の光を変えた。雲行きが変わったのを感じていた。
「私には必要ありませんわ」
「どうしてですかな」
(ふむ、これはまずいのう)
彼は自分の薬が売れそうにもないことを肌で感じていた。
(これは何とかしなくてはな)
そしていつもの口八丁手八丁に訴えることにした。
「そうは言いましてもお嬢さん」
「私も薬を持っておりますの」
アディーナは流し目をして彼に返した。
「それは?」
ドゥルカマーラは問うた。

「私自身ですわ」
彼女は悠然と微笑んでそう答えた。
「貴女御自身が」
「ええ」
彼女は微笑んで答えた。
「先生はご存知ありませんのね。女の武器というものを」
「女の武器」
「はい。女は愛の妙薬に頼ることなく好きな男を手に入れることができますわ」
「またまたご冗談を」
ドゥルカマーラはアディーナのその言葉を笑い飛ばした。
「人の心はそうそう簡単には動きませんぞ」
「それもわかっておりますわ」
アディーナはすぐに返した。
「それをわかったうえで言っていますの」
「それは凄い」
だが彼はその言葉をまだ本気にはしていない。
(そんな簡単に適えられたらわしのこのインチキの薬も売れることはないわい)
どうやらこの薬は結構な売れ行きらしい。
「私の持っている愛の妙薬」
「それは」
「この顔、そして流し目ですを」
そう言いながらドゥルカマーラを横目でチラリ、と見る。
(ほお)
彼はそれを受けて思った。
(言うだけはあるわい。これは中々強烈じゃ)
最早若い娘には興味のない彼であるがこれには少し心が揺れるものがあった。アディーナはさらに続ける。
「微笑みもありますわよ。私がこれを使ったらネモリーノなんてす

ぐに陥落しますわ」
不敵な声でそう言った。
「しかし今あの若者はわしの薬の力を得ておりますじゃ。そうそう簡単にはいきませぬぞ」
「それでもです」
やはりすぐに切り返してきた。
「先生の薬の御力でも私には適いませんわ。私の目の力には」
「やれやれ」
ドゥルカマーラはそれを聞いてもうお手上げといった様子であった。
（こりゃわしなんかの手におえる娘ではないわ。とんだ小悪魔じゃ）
再び彼女を見た。
（一本取られたわい。ここは二人の成り行きを離れたところから見るとしようか）
彼はこれからの戦略を決定した。そしてこの場は退くことにした。
「見ていらっしゃい、ネモリーノ」
一人になったアディーナは毅然とした声で言った。
「貴方の心は私のものよ」
そしてその場を去った。後には誰もいなかった。
筈であった。だがそこにはネモリーノがいた。
「アディーナがそんなことを考えていたなんて」
木の陰から出て来た。実は彼はダンスから離れて一人家に帰ろうとするところをアディーナとドゥルカマーラを見ていたのだ。そして二人の会話を木の陰から聞いていたのだ。
「嘘じゃないよな」
彼は信じられなかった。今アディーナの確かな気持ちを聞いたことが夢のようであった。
アディーナの去った方を見る。だがそこには彼女はもういない。
それでも彼はそこに見ていた。
「泣いていたようにも見えた」

彼は呟いた。
「僕のことで泣いているんだ。間違いない」
そして今彼女の本当の気持ちを察した。鈍感な彼でもわかった。
「彼女は僕を愛しているんだ。本当に。夢みたいだけれど本当のことなんだ」
彼の言葉は恍惚となっていた。
「彼女が僕を愛している、僕はこれ以上何を望むんだ？いや」
ここで首を横に振った。
「もう望むものは何もない。望んでいたものを手に入れたんだから」
今彼はその手に幸せを掴んでいた。
「彼女の心は僕の中にある。そして彼女のその吐息が僕の吐息と混ざり合い一つになる・・・・・・」
彼の中でアディーナと彼自身が踊っていた。
「神様、有り難うございます」
神に祈りを捧げた。
「もう死んでも構いません。満足です」
ネモリーノは家に入った。暫くして戸を叩く音がした。

第二幕その八

「はい」
ネモリーノは戸を開けた。そこにはアディーナがいた。
「アディーナ！？」
「ええ、私よ」
アディーナは頷いて答えた。
「ネモリーノ」
「何だい？」
「ちょっと聞いたのだけれど」
（薬のことかな）
彼は心の中で思った。
「何を？」
彼はとりあえずはとぼけた。そして逆に問うた。
「貴方兵隊に行くって本当？」
（そのことか）
彼は明日からのことを思い出し落胆した。
「ああ」
そして力なく答えた。
「明日からね。けれどそれがどうしたんだい？」
「それがどういうことかわかってるの！？忠告しておくけれど貴方は兵隊には向かないわ」
（そんなことわかってるよ。けれどそれはもういいんだ）
彼は心の中で呟いた後アディーナに顔を向けた。
「けれど君には関係ないだろう」
「おおありよ」
少しキツい声で返してきた。
「わかってると思うけれど戦場はとても危ないところよ。死んでしまうのよ」

「わかってるよ」
彼は俯いて答えた。
「貴方それでいいの？このままだと戦死するのよ」
「けど」
その声は見る見る小さくなっていった。
（君の為なんだ。仕方ないだろう）
それは言えなかった。彼にも意地があった。
「これを見て」
彼女はここで一枚の紙を取り出した。
「さっき軍曹さんから貰って来たの。契約書よ」
見ればネモリーノの字でマルが書かれている。彼がさっき書いたものに間違いない。
「払い戻してきたわ。貴方はこれで自由よ」
「自由」
「そうよ。そして」
（来たな）
ネモリーノはここでほくそ笑んだ。
（気持ちはもうわかっている後は直接聞くだけだ）
彼はアディーナの次の言葉を待ち受けた。
「さよなら」
「うん。さよなら・・・・・・って！？」
彼はその言葉を聞いて思わず声をあげた。
「アディーナ、今何て言ったの！？」
「聞こえなかったの？さよなら、って言ったのよ」
彼女は素っ気なく答えた。
「これを受け取ったら自由よ。後は何の心配もいらないわ、何もね」
「あの、アディーナ」
ネモリーノは恐る恐る彼女に問うた。
「何？」
「他に何か・・・・・・言うことはない？」

「何を！？」
「いや、その」
彼はその頑なに見える態度に思わず縮こまった。そしてアディーナを上目遣いに見た。
「何もないんだね」
「ええ。言っている意味がよくわからないのだけれど」
「わかったよ」
彼は力落ちした声で言った。
「じゃあそれはいらないよ」
「えっ！？」
今度はアディーナが声をあげた。
「当然だろ、僕が欲しいものが手に入らないんだ。だったらここにいても何の意味もないよ」
「貴方何を言っているの！？」
「別に狂ってもいないよ。僕は自分の気持ちに素直に従うだけなんだ」
彼は顔を上げ、目を閉じて言った。
「他に何があるというんだい？」
「ネモリーノ」
アディーナはそんな彼に対して強い声で話し掛けた。
「聞いて頂戴」
ネモリーノはそれには答えなかった。だが心の中で思っていた。
(聞かない筈ないだろう)
それが彼の本音であった。
(君の言葉なんだから)
彼は聞かないふりをしながら聞くことにした。
「何故行くの？」
「自分の心に従うからさ」
素っ気なく返した。
「冗談は止めて」

だがそれはアディーナの強い言葉の前に打ち消された。
「何故行くの？兵隊になる決心をしたの？」
「そうさ」
ネモリーノは彼女に言った。
「それで僕の運命をよりよく出来ると思ってね」
「違うわ」
アディーナは彼のその言葉を否定した。首を横に振った。
「貴方は自分に嘘をついているわ。私にはわかるわ」
「馬鹿なことを」
「いいえ、馬鹿じゃないわ。私は心から願っているのよ、貴方のことを」
「そんな出まかせを」
「出まかせで契約書を買い戻す？」
アディーナは言った。
「貴方の人生を心から案じているから・・・・・・だから買い戻したのよ」
「それもいつもの軽い気持ちだろう？また僕をからかっているんだ」
「黙って聞いて！」
その声が強くなった。ネモリーノはその声の前に完全に沈黙してしまった。
「よく聞いて、貴方はもう完全に自由よ。貴方を縛るものは何もないわ。そう、何処へでも行くことができるのよ」
「何処へでも」
「そうよ、だから安心して。もう誰も貴方を縛ったりしないわ」
「誰も」
「ええ。だからもう何にも悩まされることはないわ」
「何にも」
「安心してね。それは」
「うん」
ネモリーノは頷いた。ここでアディーナは一呼吸置いた。

（いよいよか）
彼はそれを見ながら思った。
（やっと彼女が言うんだ、僕を好きだって）
だが話はそれ程簡単なものではなかった。
「さようなら」
アディーナはそう言うとプイ、と背を向けた。
「え」
これにはネモリーノも呆然としてしまった。
「あの、アディーナ」
そして背を向けた彼女に対して問い掛けた。
「何？」
アディーナはそれに応えて顔を向けて来た。見返りだ。

第二幕その九

「他に何か言うことはないの？」
「他にって？」
「うん。あの、僕に言うことがない？その・・・・・・つまり」
「ないわ」
モジモジとする彼に対して言い放った。
「他に何と言えというの？私に」
「・・・・・・わかったよ」
彼はそれを聞いてまた肩を落とした。
「じゃあいいよ。やっぱり僕には兵隊になるのが一番いいんだ」
「また何馬鹿なことを言っているのよ」
「馬鹿だから言うんだよ。どうせ僕は字も読めないしものも知らない。畑仕事以外は何も出来ない男さ。だけれどね」
彼は言った。
「僕だって自分がどういう奴かわかっているつもりさ。だからあえて言わせてもらうよ」
「何？」
「自分の気持ちに素直でいたい、それだけだ」
「それだけ？」
「ああ、他に何があるっていうんだよ」
今度は彼が背を向ける番であった。
「だから僕は行くよ。望むものが手に入らなくて何が自由なんだ、そんなもの何の意味もないよ」
「ネモリーノ」
「さようなら、君が言うよりも僕の方から言うよ。もう永遠にお別れさ」
「永遠・・・・・・何言っているのよ」
アディーナはその言葉に焦りを覚えた。そして彼に対して強い声

で言った。
「待ちなさい！」
「嫌だよ」
「いいから聞きなさい」
そんな彼を無理矢理引き留めた。そして言った。
「貴方がまだ人の話を聞く意志があるのなら聞きなさい、よおくね」
「何をだい？」
彼は振り向いた。アディーナはそんな彼を待っていたかのように口を開いた。
「もうこうなったら全部言うわ。聞きなさい」
「うん」
彼は完全に飲まれていた。そして彼女の言葉に耳を集中させた。
「貴方が好きよ。貴方が本当に好きよ」
「本当！？」
つい先程までの余裕は何であったのだろうか。彼は思わず聞き直した。
「この場で嘘を言って何になるのよ」
アディーナはそんな彼を見上げて言った。
「貴方は私の可愛い人よ、それ以外の何者でもないわ。そしてね」
「そして・・・・・・」
「貴方と一緒になりたいわ。そして何時までも幸せに暮らしたいわ。私の言いたいことはそれだけ」
「あの」
ネモリーノは今聞いた言葉を信じられなかった。思わず聞き直した。
「それ・・・・・・本気！？」
「本気よ」
「冗談じゃないよね」
「嘘だと思うなら」
彼女はそんな彼に対して言った。

「その頬っぺたをつねって御覧なさい。よくわかるわよ」
「わかったよ。つねるまでもないよ」
ネモリーノは満足した息を吐き出しながら言った。
「先生は僕に愛をくれたんだ。これ以上の贈り物はないよ」
「そうよ。ネモリーノ、貴方は私の想い人よ」
「本当なんだね、アディーナ」
彼はまた問うた。
「本当に君は僕のものなんだね？僕の恋人なんだね？」
「・・・・・・何度も言わせないでよ」
彼女は頬を赤らめさせていた。
「貴方が好きよ、本当に」
「ああ、神様」
ネモリーノはそれだけで満足であった。もう他には何もいらなかった。
「有り難う、本当に有り難うございます。僕の望みはもうありません」
「私はあるわ」
「えっ！？」
「貴方と何時までも幸せに暮らすことを」
そう言ってネモリーノの手をとった。大きな、それでいて温かい手であった。
「この手で私を包み込んでね。この優しい手で」
「うん・・・・・・」
彼は頷いた。そしてアディーナを抱き締めた。
アディーナも彼を抱き締めた。そして二人は広場へ向かった。そこには兵士達もいた。
「おや？」
ベルコーレもいた。彼は二人の姿を認めて顔を上げた。
二人は仲良く手を取り合って歩いている。ベルコーレはそれを見て頬を緩めた。

「やっと一緒になったか」
だがそれはすぐに引っ込めた。
「ちょっと待った娘さん」
厳しい顔をしてアディーナに問うてきた。
「これは一体どういうことかね？私との式を途中で放り出してその男と一緒に歩いているとは」
「見ての通りよ」
アディーナは満面に笑みをたたえてベルコーレに言った。
「貴方もわかっていたのでしょう？」
「確かに」
（どうやらこの娘は俺よりも遙かに戦上手だったようだな）
彼はここで自分の考えも見透かされていることを悟った。
「まあいいとしよう」
結末はわかっていたので迷うところはなかった。
「どのみち女は他にも一杯いる。軍人をやっていれば苦労することもあるまい」
「あっさりしているのね」
「軍人は引き際も見極めないとな。おい、そこの若いの」
そしてネモリーノに声をかけた。
「あんたも幸せにな。またこの村に来たら一杯やろう」
「はい」
ネモリーノは幸福で頭が一杯だった。にこやかな笑みでそれに答えた。
「絶対アディーナと幸せになります」
「ああ、幸せにな。それは祈ってるよ」
「ほっほっほ、どうやらわしはまた人を幸せにしてしまったようですな」
ここでドゥルカマーラも姿を現わした。
「先生」
ネモリーノは彼に顔を向けた。

「おお、若いの。どうやら願いは適ったようじゃな」
「はい」
彼は答えた。
「これも先生のおかげです」
「そうじゃろ、そうじゃろ」
彼は上機嫌でそれを聞いていた。
「わしにできぬことはないからの。どんなことでも思いのままじゃ」
ここで早速演技の上手いところを見せていた。

第二幕その十

「恋も富も皆適えることができますぞ」
「富も」
「うむ。お若いの、あんたは今では村で一番の長者じゃ」
「僕がですか！？」
彼はその言葉に面食らった。
「まさか、そんなことが」
「いやいや、本当に」
ドゥルカマーラは戸惑う彼に対して言った。
「これは悲しいことでもありますが」
「悲しいこと」
「そう。聞きたいですかな」
「ええ。何かあったのですか」
「貴方の叔父さんですが」
「あの叔父さんが」
「亡くなられたのです。そしてその遺産が全て貴方のものとなったのですじゃ」
「叔父さんが・・・・・・」
ネモリーノはそれを聞いて呆然となった。
「あの優しい叔父さんが死んだなんて」
彼は急に悲しい顔になった。今までの幸福は遙か彼方に消え去ってしまったかのようであった。
「その心ですな」
ドゥルカマーラはネモリーノのその表情を見て言った。
「その優しい御心が貴方に幸福をもたらしたのですじゃ」
「というと」
「神様がわしを貴方のところへつかわしたのですじゃ。これも日頃の行いの賜物ですかな」

「神様が僕に」
「まあわしの薬が全てを適えたのですが。それでもわしは神様の御導きがなければここには来ませんでしたな」
「そうね」
アディーナもそれを聞いて言った。
「ネモリーノと私が一緒になることができたのは先生のおかげ。けれど」
「それをもたらしたのは僕の心だったと」
「そういうことですじゃ」
ドゥルカマーラはそれに答えた。
「そしてその願いを適えたものこそこの薬」
「俺にとってはちょっと忌々しい薬だがな」
ベルコーレが苦笑しながら言った。
「だが効果はてきめんだな」
「本当に。先生、有り難うございます」
「いやいや」
アディーナの感謝の言葉に対して鷹揚に答えた。そこへジャンネッタや娘達、そして村人達がやって来た。
「あ、いたいた」
「ここにおられたのか」
どうやら彼等はドゥルカマーラを探していたらしい。ネモリーノの話がすぐに広まったようだ。
「先生、薬はまだありますか？」
「勿論」
彼は答えた。
「幾らでもありますぞ、ほら、こちらに」
笛を吹く。すると彼の馬車がやって来た。
「この中に幾らでもあります。さあ順番に並んで下され」
「はい！」
村人達はそれに従った。

「これは綺麗になる薬、これは脹れものに効く薬、頑固な者にはこのパイを、眠り薬はこれ」
彼は馬車の中のものを次々に取り出して説明する。
「コーヒーなぞ比べ物にならない目覚めの薬、勇気を与える薬」
「本当に何でもあるんですね」
「当然ですじゃ、わしに作れないものはありませぬ。そしてこの薬を皆様に差し上げることこそわしの使命」
（ふむ、こうしたことも悪くはないな）
彼は内心そう思っていた。
「お若いのはもういりませんかな？」
そしてここでネモリーノに問うた。
「いえ、僕は」
彼はそれに対して笑顔で手を横に振った。
「もう何もいりません。だって僕は欲しかったものが今この手にあるんですから」
そして手の中にいるアディーナを見た。
「そうね、私も」
アディーナも彼を見た。
「他には何もいらないわ。願いはこのまま永遠に二人でいること」
「左様ですか、それではいらぬお節介でしたな」
「けれどわし等にはお節介はまだ足りませんよ」
「そうですよ、早く薬を下さい」
彼等も何時の間にかドゥルカマーラの薬を信じるようになっていた。我先に金を差し出す。
「並んで並んで」
ドゥルカマーラはそんな彼等を宥めた。そしてまた並ばせる。
「さあさあそちらにはこれ、それであちらには・・・・・・」
金を受け取り薬を手渡す。薬は忽ちのうちになくなった。
「後はお楽しみですじゃ。皆様に幸福が訪れますぞ」
「すぐにですか！？」

「勿論」
彼は胸を張って答えた。
「このドゥルカマーラは嘘を申しません」
（まあこれ自体が嘘じゃが）
やはり本音は隠している。
「皆さんが望まれることが適います、そしてこの村は幸せに包まれます」
「それはいい！」
「それも先生の御力ですね！」
「左様、その証拠が」
「僕達ですね」
「はい」
彼はネモリーノ達に答えた。
「僕達は薬のことは決して忘れません、これは本当です」
「私もです。それでこうやって一緒になれたのですから」
「まあ俺にとってはちょっと妬ける話だが」
ベルコーレはまだ苦笑していた。
「これも新しい恋をしろってことだろうな。どうだい、娘さん」
そこでジャンネッタに声をかけた。
「今度この村に来ることがあったら付き合わないかい？」
「今度って何時？」
「まあ駐屯地がこの地域だからまたすぐに」
「だったらいいわ。今度ここに来たらね」
「よし」
彼は彼で新しい恋を見つけていた。
「さて、薬も見事全部売れてしまいました」
見れば馬車の中は空になっていた。
「残念なことにこれで皆さんとお別れしなくてはならなくなりました。しかし御安心下さい」
彼は大きな身振りをしながら話を続ける。

「私はまたこの村にやって来ます。そしてまた薬を皆さんにお届けします」
「是非お願いします！」
村人達は皆彼に対してそう声をかけた。兵士達もそれに加わっている。
「すぐに来て下さいよ！」
「待ってますから！」
「はい」
ドゥルカマーラはそれに恭しく答えた。
「必ず来ます。それもすぐに」
「おおっ！」
彼等はそれを聞いて喜びの声をあげた。
「されど今はさようなら。次にお会いする時まで暫しのお別れを」
「約束ですよ」
「はい。何度も申し上げているようにこのドゥルカマーラ、嘘は申しません」
にこりと笑ってそう言った。
「それではその日までさようなら」
「さようなら！」
村人達も兵士達も別れの言葉を贈った。
「先生有り難う！」
「御恩は一生忘れません！」
ネモリーノとアディーナもいた。ベルコーレも苦笑しながら手を振っている。その横にはちゃっかりとジャンネッタを置いている。
ドゥルカマーラは後ろに向かって手を振りながらその場を去っていく。馬車は次第に遠のいていく。
村人達は彼の姿が完全に見えなくなるまで手を振り別れの言葉をかけていた。そして二人の幸せを適えたこの愛すべき山師のことを何時までも忘れなかった。

愛の妙薬　完

2004・11・6

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3411f/

愛の妙薬

2011年4月28日00時35分発行